

ロマンティックは似合わない

目次

ロマンティックは似合わない 5

君のために僕がつづる物語 133

カワイイヒト 253

ロマンティックは似合わない

プロローグ

社員食堂の真ん中辺り、華やかな集団の中から楽しいげな声が聞こえる。

その中心にいるのはつい最近までわたしが好きだった人。

そして、隣には幸せそうな顔で笑っている、彼の恋人。

ずっと地味なお局様と噂されていたその人は、今は見違えるほど綺麗になった。そんな二人のまわりには、気の合う友人たちが大勢集まっていて、みんな楽しそうに笑っている。

初めて彼を見た時、ようやく理想の人に出会えたと思った。

ハンサムで、優しく微笑む様子はまるで物語に出てくる王子様みたいで、この人はきつと、たった一人のお姫様を大切に守っていく人だと思った。まさに女の子の理想をそのまま体現したような、本当に素敵なお人。

わたしが子どもの頃からずっと夢見てきた王子様が、目の前に現れたのだ。

そんな彼に少しでも近づきたかったから、努力は惜しまなかった。最新のファッション雑誌を何冊も読んで装いを凝らし、仕草や言葉遣いにも気を使った。もともと猫かぶりだったけれど、以前にも増して外面の良さを磨いた。

お昼休みには近くに座り、慣れないお弁当でアピールして、彼が出る集まりには必ず参加して、会話を合わせて。そうやっていつもそばに居て、誰よりも完璧な女の子を装ってきた。

あの中に入りたかった。優しくそんな彼と大勢の友人。

ずっと憧れだった、楽しくて温かくて、幸せそうな場所。

ついこの間までは、辛うじてあの輪の中に居られたのに。

今はそこに入れず、悲しさと口惜しさで胸が痛い。

何がダメだったんだろう。

自分なりに努力はしたつもりだった。男の人に好かれる努力。

今考えるとなんて空しい言葉だろう。その努力を続けてきた結果がこれだなんて。

諦めないで強がりと言ったこともあったけど、どう転んでも無理なことはわかっている。今更にくら努力しても無駄。彼はわたしを選ばなかった。

以前、彼がわたしに向けた冷たい目を思い出すと、今でもからだが震える。彼の優しい視線も言葉も、今はすべて彼女だけに向けられている。彼のお姫様は彼女だけなのだ。

こうして少し離れているとはいえ、同じ場所にいるのは拷問に等しい。楽しそうな彼らを見るわたしの様子を、まわりの人たちはこそそこそと窺い、何かささやいている。きつと笑っているんだろう。あれだけあからさまなアピールをして、そして振られた女。

わたし、有田七実ありたななみは哀れなピエロ、もしくは当て馬だ。

“七実は可愛いから、きつと上手くいくわ”なんて友人たちの言葉は、嘘ばっかりだった。

まわりの好奇な目が怖い。蔑むような視線が、自分に突き刺さるような錯覚すら覚える。ついこの間までまわりに居た人たちは、さざ波が引くように居なくなつた。背筋がゾツとする感覚と、言いよのない孤独。

傷ついた心の隙間から、閉じ込めていた過去の自分が浮かび上がってくる。

——まっつ、いけないでっ。

泣きながら母を追いかける幼い自分。危ない、と引き止める祖母の腕。

——おかあさんっ、まっつ。良い子でいるから、おいていかないでっ。なんでもいうこときくから、おかあさんっ……

頭を振って、記憶をもう一度心の奥底に閉じ込めて、鍵をかける。

わたしはもう何も出来ない無力な子どもじゃない。自分の幸せは自分で掴める。

これまでの努力を無駄にはしない。みんなを見返すくらい素敵な人と素敵な恋をして、わたしだけの幸せな場所を必ず手に入れて見せる。

そう心に決めて、惨めな片想いによくけりをつけた。

1

休日は朝寝坊すると決めている。たとえば、今日みたいに見事な冬晴れの日曜日でも。

十二月の朝は寒い。それは太陽が昇ってしばらくしても、あまり変わらない。

あくびをかみ殺しながら起き出してきたわたしは、そそくさと居間のコタツに入り、祖母が作ったおはぎをもそもそと食べる。

朝食におはぎなんて……と思いつながら、大きなお皿に山盛りになつた大量のおはぎを眺めた。おはぎは祖母の好物で、祖母はお彼岸の時期でなくても自分が食べたい時に大量に作るのだ。

まあ、わたしも好きだから良いんだけど。

「七ちゃん、食べ終わったら庭掃除してきて」

目の前にお茶の入った湯のみを置きながら、祖母が言った。

祖母の名前は有田五月。今年で七十五になった、わたしの唯一の家族だ。本当はほとんど白い髪をしつかりと茶色く染めていて、年齢のわりに若く見える……と言われている。

「んー……アチッ！」

生返事をして湯のみに手を伸ばし、その熱さに驚いて指を引つ込めた。

「もうお祖母ちゃん、これ熱湯じゃない。知ってる？ お茶っていうのは八十度で煎れるのが一番美味しいんだよ」

新人の頃、先輩に教えてもらったことを思い出して言ってみる。

「何言ってるの。お茶は熱ーいのが一番なの。そんなに言うなら自分で煎れな」

「……やだ、めんどくさい」

そんな細かいこと、会社だけで十分だ。

指先で湯のみを持ちつつ、フーフーと息を吹きかける。もちろんそんなことで冷める温度ではない。

「あんたは本当にズボラだねえ」

まだ熱いお茶に息を吹きかけつつ、呆れ顔の祖母の顔をちらりと見る。

裏表の落差が激しいことは自覚している。会社では、大人しくて女の子らしくて、いつも可愛い有田七実。家ではただのズボラな女だ。

今の格好だっておしゃれとは程遠い。ラフなトレーナーと高校生の時に着ていた体育のジャージ。肌寒くなった頃から毎日羽織っている赤い半纏は、祖母の手作りだ。

会社で四六時中貼り付けているうそ臭い笑顔は、家では皆無。ここでは取り繕う必要がないからだ。会社での自分が特別なのだ。もともとあんな性格じゃない。賑やかなのもキライだ。それでも小さい頃から猫をかぶり続け、普通の女の子を演じてきた。

だというのに、理想が高すぎるものだから、これまで彼氏など出来なかった。

このままじゃダメだと思いつつながら社会に出て、そしてあの人に出会った。ようやく見つけた理想の人。営業部の藤崎彬さんだ。

この人を逃したくないと、自分の性格を百八十度以上曲げて、男にとつての理想的なキャラクターを徹底的に作り上げた。その努力は今思い出しても涙ぐましいばかりだ。まあ実際、最後は涙で終わったのだけだ。

おはぎを二つ食べ終え、ようやく程良い熱さになったお茶を飲んで、のろのろとコタツから出た。

自分の部屋に一旦戻り、半纏を脱いで、これまた高校の指定のウィンドブレーカーを着た。そして廊下に出て、祖母が用意していたゴミ袋を持って外に出る。

玄関から庭にまわって、自宅と同じ敷地内に立つ隣の建物を見上げた。

「相変わらずボロいな」

木造二階建て、築五十年を迎える下宿屋『さつき荘』。六畳一間の部屋が全部で八つ。玄関、トイレ、洗面所は共同、お風呂はない。びっくりするくらいボロボロだし、食事も付かないけど、駅が近くて家賃もそこそこ安いので、空き部屋が出ることはまずない。

自宅である、同じくらいボロかった母屋は十年ほど前に取り壊し、こぢんまりとした平屋に建て替えた。中は台所と居間、それから祖母とわたしの部屋だけでさして広くはないが、祖母と二人で住むには十分な間取りだ。

まわりの人たちは、さつき荘も今風のワンルームマンションにでも建て替えちゃえば良いのに……と言ったけれど、祖母は頑なに聞き入れなかった。この下宿屋には早くに亡くなった祖父との思い出が詰まっているからって。

老朽化が進んでいて危ないので、母屋の建て替えと同じ時期に耐震工事と水まわりのリフォームをしたけれど、見た目はそんなに変わらない。ちなみにこれでもエアコン完備だ。

広い敷地や不動産は羨ましがられることもあるけれど、手入れはこの上なく面倒だ。建物のメンテナンスはもちろんのこと、ゴミ出しの管理や庭木の手入れ、それらにおけるご近所との兼ね合いも考えなくちゃならない。

大家として管理するなら建物は新しい方が絶対に楽なのに……そんなことを思いながら、庭の隅の物置に竹箒を取りに行った。

この庭の真ん中には大きな銀杏の木がある。その下には大量の葉っぱが落ちていて、まるで黄色い絨毯のようだった。

「うへえ……」

見ただけで情けない声が出た。

枝にはまだ半分ほど葉が残っていて、数日中には全部落ちそう。剪定は業者をお願いしているけれど、こういった日々の掃除はわたしの仕事だった。毎年のこととはいえうんざりしながら、落ち葉をかき集める。

何か悲しくて、こんな天気の良い日曜日に庭掃除なんかしているんだろう。それはもちろん、デートをする相手が居ないからだ。

あの完膚なきまでの失恋から一年以上経っても、いまだに彼氏は出来ない。藤崎さんに振られた哀れな女……というイメージからはすでに脱却できている、はずだけど。

彼のために作った外面は今でも完璧に保っている。流行の洋服、お化粧や髪型。男の人が喜びそうな話し方や仕草も。

そうしていれば、ちやほやされるのがわかっているからだ。どんな男だって、暗くてズボラな女よりも可愛い女の子の方が良いだろう。

なのに、上手く行かないのはなぜなのか。

言い寄ってくる男が居ないわけではないけれど、どんなにちやほやされても、まったく心が動かない。

理想が高いから、あの人以上に素敵な人が現れないから……そう言い切りたいところだけれど、だんだんすべてはわたしの不幸な生い立ちのせいだとも思えてくる。

会ったこともない生物学上の父。未婚でわたしを産み、その後勝手に結婚を決めて、小学校に入る前のわたしを残して出て行ったまま、一度も帰ってこない母。

二十五歳になろうとしている今でも、封じているはずの記憶が心に小さな傷をつけていく。自分が幸せな、温かな場所を求める一番の理由がそこにあることは自覚していた。二度とあんな思いをしないためにも、将来自分が持つであろう子どものためにも、完璧な恋人が、伴侶が欲しいとずっと思っていた。

それでも、過去は辛いものだけじゃない。いつも祖母が居てくれた。そして、これまでこの下宿で暮らしていた皆さんの人たちがそばに居てくれた。

めそめそしていたわたしに、何も言わずにお菓子をくれた大学生。

宿題を教えてくれたのは、教師を目指していた女子大生。

風邪をこじらせた祖母を、動揺するわたしと一緒に病院へ連れて行ってくれた会社員の男の人。

——女の子はいつでも可愛くしてなきや。

そう言っ、中学生のわたしにお化粧の基本を教えてくれたOLさん。

たくさんの人が、悲しみの底に居たわたしを少しずつ元気にしてくれた。

そんな優しい人たちに囲まれていれば優しい人間になってもいいはずだけど、多少歪んでいるのは、わたしがもともとそういう性格だからということなのかもしれない。

まあ、外面そとづらは良いんだし、素すの時も誰かに迷惑をかけているわけではないんだから、別に良いだろうと割り切ってはいる。

わたしの高過ぎる理想にかな適う人にはなかなか出会えそうにない。今更だけど、もうそろそろ現実を見るべきだろうか。

十分ほどかかって葉っぱを集め、ゴミ袋に詰めたら大きな袋で三つ分にもなった。落ち葉だらけだった庭は多少きれいになったけれど、今もまだ、ハラハラと黄色い葉っぱが舞っている。

「はあ、疲れた」

ため息をついて背筋を伸ばした。

「七実ちゃん、ご苦労様」

突然声を掛けられて振り返る。下宿の一階の窓から、黒ぶち眼鏡を掛けた、もっさりした男が顔を出していた。

「あら。こんにちは、高木たかぎさん」

今現在、このさつき荘の一番の古株である高木慎哉しんざさんだ。わたしが高校生になる少し前から住んでいる。当時確か大学卒業直前とか言っていたから、多分もう三十歳は過ぎてはいるはずだ。

不潔ふけつというわけではないけれど、男にしては長めの前髪が額に覆い被さっているせいで、もっさりして見える。服装にも無頓着むとんちやくで、今だってほら、わたしの祖母が作った紺色の半纏はんてんを着ている。

その色違いを自分が愛用しているだなんて、口が裂けても言えないわ。

生活は不規則で、いわゆる普通の会社員とは違う。わたしが学生の頃はアルバイトをしているみたいだったけど、今はいったい何をしている人なのか、長い付き合いだけど知らない。

高木さんは持っていた布団を窓の柵に干すと、丁寧にその表面を手で払った。わりと几帳面きちょうめんではあるらしい。

「七実ちゃん、あの……その葉っぱ、一枚もらえない？」

布団を干し終えた高木さんが申し訳なさそうに落ち葉を指さした。何に使うの？ と思いながら、ちよと落ちてきたキレイな形の葉っぱを拾って窓まで近づき、その手に渡す。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

もっさりとした見かけとは対照的なキレイな長い指が、葉っぱの軸をそとと挟む。高木さんはそのまま葉っぱをお目様にかざし、しげしげと眺めていた。

何を考えているのかしら？ ますます怪しい人だわ。

でも、顔のつくりはそんなに悪くないのよね。長い前髪と厚ぼったい眼鏡の向こうに見えている目は切れ長でくつきりした二重だし、鼻筋も通っている。今風のイケメン……とは少し違うけれど、整った顔立ちをしているのは確かだ。

でも、如何いかんせんパツと見にはもっさりしているから、いろんなところが台無しになっている。普段の生活も怪しいしね。

「高木さん、ちゃんとご飯食べてるの？ またそんな青白い顔して」
不健康そうな顔を見ながらそう言うと、彼は、

「え、あ……うん、まあ」

と、もごもご言葉を濁す。そんなおどおどした態度に少しイラついた。高木さんはいつもこんな感じだ。わたしよりもずっと年上の男の人なのに、妙に腰が低い。

「もっと規則正しい生活をした方が良くない？ あ、そうだ。お祖母ちゃんがおはぎ作ったから、後で持っていつてあげる」

「あ、うん、ありがとう」

高木さんが嬉しそうに笑う。その顔は、わたしのなけなしの母性本能をわずかにくすぐった。

うん、時々すごく素敵に見えるのは間違いないんだけどな。でもそれを上回るもっさり感が残念な印象しか残さない。まったくもって残念な人だ。

肩をすくめて顔を逸らし、大分落ち葉の少なくなった地面をまた箒で掃いた。

なぜだろう。高木さんが相手だと、表の顔が一切出来ない。こんなに無愛想な態度は社会人になつてからはもちろん、学生の頃だつて取ったことはない。彼以外には。

後で必ず後悔するくせに……まるでイジメツ子みたいじゃない、わたし。

だけど元はといえば、年上なのにいつもおどおどしてる高木さんが悪いと思う。

昔から、わたしが何を言っても、どんな我俣を言っても、怒らないしヘラヘラしてる。それが妙に気に障る時がある。

もう。可愛くて優しい有田七実はどこに行ったの？

これというのきつとプライベートが満たされていないからに違いない。

あーあ、どこかに素敵な人が居ないかな。

クリスマスまであと一ヶ月弱。それまでに恋人が欲しい。

憎らしいくらい晴れ渡った青空を見上げながら、切実にそう思った。

2

年末が近いせいで、社内の動きは徐々に慌ただしくなってくる。

先日の冬晴れの青空はどこへやら、ここ数日は曇り空が続き、気温も一段と低い。室内の暖房だけでは耐えられないので、仕事中はカーディガンを着て、持参のひざ掛けを腰にきつく巻きつけている。

所属する総務部の自分の席でパソコン画面に向かいながら、こんな時こそお祖母ちゃんの熱いお茶が飲みたいわ、なんて考えていると、慌ただしい足音が近づいてきた。

「七実！ 例の新しい人見た？」

部屋に駆け込んで来て開口一番そう言ったのは、同じ総務部に勤める同期の吉村聖子だった。人懐こく、新人研修初日に声を掛けられて以来、ずっと友人として付き合ってきた。彼女はひとこと

で言えば元気、裏を返せばやかましいと言えなくもない。

彼女の言う新しい人とは、今週から情報管理部に助っ人として来ている人のことだろう。年末進行で人手が足りないから、別の会社からわざわざ来てもらったという噂は聞いていた。

「まだ見てないわ」

わたしがそう答えると、聖子がニヤリと笑った。

「結構イケメンだった！ しかも独身、彼女なし！」

楽しみに言いながら自分の席に着く。聖子の机はわたしの隣だ。

「嬉しそうだね？」

「当然よ！ わが社のイケメンどころはみーんな売約済みだもん。つまんないったらなかったわ。でもこれでまた楽しみが増えたわね」

鼻歌交じりに仕事を始めた聖子を横目で見ながら、わたしは小さく肩をすくめる。

まったく、何をしに会社に来てんだか。……って、わたしがそれを言ったらおしまいか。

確かに、藤崎さんをはじめ、わが社で人気のある男性社員は皆すでに決まった相手持ちだ。わたしと同じように、恋人を探している彼女にとっては願ってもないチャンスだろう。

バカバカしいとは思いつつも、自分だってあわよくば……と思わなくもない。会社の中での出会いはもう諦めたつもりだったけれど、もしかしたらその人はわたしの理想の人かもしれない。

そんな淡い期待を覚えながら、自分も仕事を再開する。

そして、噂の彼との出会いは、その数時間後に訪れた。

午後になって社内の備品の在庫確認のために、聖子をはじめ大勢が席を外していた。室内に残っているのは、わたしを含め、ほんの数人だった。

わたしが自分の席で在庫整理のための書類を作っていると、入り口から様子ようすを窺うかがっている男性がいることに気づいた。

ちらりと見えたハンサムな顔に見覚えはない。もしかしたら……そう思いながら席を立ち、入り口に向かった。

「何かご用ですか？」

しつかりと身に付けた、はにかむような笑みを向け、そこに立っている男を見つめた。

二十代後半、雑誌のモデルのような明るい色のふんわりとした髪、一見優男風の今時のイケメンだ。「あ、これをお願いします」

少し慌てたように差し出された書類を受け取り、サッと目を通す。するとそこには情報管理部の文字。やはり件の彼かたのようだった。

「ではお預かりしますね」

言いながら顔を上げると、彼がまじまじとわたしを見ていた。自分で言うのもなんだけど、そんな目で見られることには慣れている。

「……有田、七実、さん？」

「はい？」

なぜ知ってるの？ と口に出す前に、彼がわたしの名札を見ていることに気づく。

「あ、いや。日比野武志ひびのたけしです。しばらくお世話になります」

彼——日比野さんはニコリと笑うと、そのままきびすを返して去っていった。

確かに、結構イケメンだわ。聖子が喜ぶのも頷ける。

でも、果たして彼はわたしの理想の人だろうか……？ 藤崎さんの時のように、初対面で引き寄せられるような何かはない。

いや、もう完璧を求めるのはやめにしなければ。一目惚れなんて、どうせろくなことがないんだから。

でも、彼が理想の人なら良いのにな、とも思う。幸せを願う気持ちはやっぱり止められないのだ。小さく鼻歌を歌いながら、受け取った書類を担当者の机の上に置いた。

3

今日はいつものよりも早く目覚ましが鳴った。温かな布団の中から腕を伸ばし、部屋の寒さに半ばイラツとしながらすぐさまベルを止める。

寒い、眠い。でもやることもある。

えいっと起き上がり、手探りでまだ暗い部屋の電気を点けた。六畳の和室にはシングルベッドと

小さなテーブルしか置いてない。一間いっけん分ある押入れにあれこれ突っ込んでいるおかげで、部屋の中はスッキリとしていた。

パジャマの上から半纏はんてんを羽織って居間に入ると、早くから起きていた祖母がのんびりとテレビを見ていた。

「おはよう、七ちゃん」

「……はよ」

「今日は早起きね」

「……会社に行く前に蛍光灯換えて、って言ったの、お祖母ちゃんでしょ？」

「あら、そうだっけ？」

「そうよ。しかも寝る前に言ったんだから。もつと早く言ってくれれば良かったのに……」

恨みがましい目で見ると、祖母がよっこらしよと立ち上がった。

「先に朝ごはん食べるでしょ」

そう言って、逃げるように台所に消える。

あくびをしながらもぞもぞとコタツに入り、まだはつきりと開かない目でテレビを眺める。いつもなら祖母を手伝うところだけど、今朝は無理だ。わずか三十分とはいえ、早起きは辛い。

コタツの天板に顎あごを乗せて早朝のニュースを眺めていると、すぐに良い匂いがしてきた。いそいそと祖母がコタツの上に朝ごはんを並べ始める。台所にダイニングテーブルはあるけれど、祖母もわたしも居間のコタツで食べるのが好きだった。

白いご飯とお味噌汁。焼き魚に玉子焼きにおしんこ。そして熱々のお茶。定番の朝ごはん。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

そう答えながら祖母が向かいに座る。やたらと熱いお味噌汁のお椀を指先で持って、フーフーしながら一口啜る。

「アチ」

この味噌汁も熱湯に近い。味噌を入れたら煮立たせるなどあれだけ言ってるのに、祖母は味噌汁をグラグラと煮てしまう。風味も何もあつたものじゃない。

歳を取ると温度感覚が鈍くなるんだろうか。目の前で熱いお茶をぐびっと飲み込む祖母を見ながら、ぼんやりと考えた。口に出せば、「じゃあお前が作れ」と言われそうなので、ひたすらフーフーする。

一時期、真剣に料理を覚えようとレシピや豆知識をたくさん仕入れた。けれど実際に調理するのは苦手だ。藤崎さんに片想いをしていたころは、せっせとお弁当を作って祖母を驚かせもしたけれど、結局は便利な冷凍食品のお世話になった。祖母に任せても良かったけれど、茶色いおかず中心になるのがいやで、自分で何とかしてきた。近頃の冷凍食品は優秀だ。

食事を終え、洗面台で顔を洗った。一度部屋に戻って、パジャマと半纏を脱ぎ、動きやすいジャージに着替えて、廊下に用意してあつた細長い蛍光灯と脚立、軍手を持って、さつき荘に向かった。

一歩外に出ると、その寒さに思わず引き返したくなる。白い息を吐きながら仕方なく歩き出し、

下宿の共同玄関の引き戸をそっと開けて中に入る。見れば確かに一階廊下の真ん中辺りの蛍光灯がチカチカと点滅している。

靴を脱いで、ギシギシと音のする廊下をなるべく静かに歩いた。電灯の真下に脚立を置き、廊下の壁に新しい蛍光灯を立てかけたあと、一度玄関まで戻って廊下の電気を消した。朝の光が少し入ってきているので、真っ暗というほどでもない。

音を立てないように脚立に上り、ジャージのポケットに突っ込んでいた軍手をはめて手を伸ばす。我ながら手馴れたもので、蛍光灯は簡単に外れた。古い建物は天井が低いので、小柄な自分でもこのくらいはできるようになったのだ。

一旦降りて、古い蛍光灯を床に置き、新しいものを持ってまた脚立に上る。

とその時、玄関の引き戸が静かに開いた。蛍光灯を持ったままそちらを向いて、入ってきた人を何とはなしに眺める。

片手にコンビニ袋を持ち、見るからに疲れたような顔をした高木さんだった。

高木さんは何も言わず俯いたまま、わたしがいる場所から少し手前の扉の前までやってきて、ポケットを探る。

「朝帰り？」

「っ!!!」

声を掛けると、高木さんはまるで漫画みたいに飛び上がった。

やっぱり気づいていなかったのか。

「そこまで驚くことないじゃない」

呆れてそう言うと、高木さんはびっくりした顔のまま、わたしを見上げた。

「ごめん。し、仕事で……」
なぜどもる。

この人って本当に何の仕事をしてるんだろう。時々朝帰りしてるし、何日も帰ってこない時だってあるらしい。そうかと思えば、一日中自室に籠^{こも}っていたりする。

って、わたしは別に、普段から彼のことを見張^{まわ}っているわけじゃない。祖母が逐^{おそ}一^{いち}報告^{ほうこく}してくるから、それなりに気になってしまうのだ。

持っていた蛍光灯をさっさと取り付け、脚立^{きゃくたち}から降りようとしたところで、下に人の気配を感じた。見ると、高木さんが脚立を支えてくれている。

「あら、ありがとう」

そう言うと、はにかんだような笑顔になる。

あらまあ、高木さんつてもつさりのわりに可愛い顔するのね。なんて感心しつつも、いやに近い彼の顔に、柄にもなく少しだけ緊張した。

それから高木さんに手伝ってもらって、後片付けをする。パンパンと手を軽く払って彼を見上げて、「手伝ってくれてありがとう。もう終わったから、あとは静かよ。ゆっくり寝てれば？」と促す。

「ありがとう。あ、あの、それ、母屋^{おむちや}まで持っていこうか？」

まとめた荷物を見ながらそう言う高木さん。

「別に平気よ。軽いから。それより早く寝たら」

「う、うん。ありがとう」

高木さんはなぜか嬉しそうにもつさりした頭を下げて、そそくさと部屋に入ってしまった。

高木さんの笑顔って結構可愛かったのね、子犬みたいで。ま、見た目はもっさい大型犬だけど。

背が高いからまともに見上げてると首が疲れるし。

それにしても髪の毛、結構さらさらで良い匂いがしたな。銭湯にでも寄って来たのかしら？

そんなことを考えながら、また荷物を担いで母屋に戻った。

蛍光灯の取換えが思ったより早く終わったので、時間に余裕がある。ジャージから通勤用の服に着替え、のんびりとお化粧をして、いつもの時間に家を出た。

電車を乗り継いで駅に降りると、冷たい空気が頬に突き刺さる。首に巻いていたマフラーの位置を少し上げて、大勢の人に交じって改札を抜けた。

ビル風が吹き抜ける中を足早に歩く。ようやく会社に着き、玄関ロビーに入るとその暖かさにホッとした。更衣室で制服に着替えて総務部のあるフロアーを目指して歩いていると、前から例の人、日比野さんが近づいて来るのが見えた。

あら、ラッキー！ そう思いながらも、素知らぬ顔をする。

日比野さんはそんなわたしに気づくと同時に、片手を上げた。

「よお」

「……おはようございます」

馴れ馴れしい態度に、胸のかすかな高鳴りがスツとおさまった。昨日と随分態度が違う。若干の違和感を覚えつつ、それでも笑顔で挨拶を返す。一方日比野さんは、そんなわたしをあからさまにジロジロと見ていた。

「お前って……結構可愛かったんだな」

いきなりお前呼ばわりか？ 内心ムツとしつつもリアクションに困っていると、彼はニヤッと笑って行ってしまった。

……何よ、あれ。ちょっと感じ悪くない？

「何あれ!? 超ワイルドー!! 素敵ーっ」

突然聞こえてきた叫び声。振り返って見れば、どこからか現れた聖子がハート型の目をして日比野さんの後ろ姿を見つめていた。

ちょっともう、朝っぱらからビビらせないでよ。

「何言ってるの?」

半ば呆れながら聖子の腕をぼんと叩く。

「もうっ七実ったら、可愛いつて言われ慣れてるから平気なのね。わたしだったら悶絶もんせつものよっ」
聖子の言葉に一瞬戸惑う。彼女の態度に卑屈などころはないけれど、そんな風に思われていたのかと思うと、内心ヒヤリとした。

男受けする態度は、女受けが悪くなりがちだ。藤崎さんのために作り上げてきた「可愛い有田さん」も、男に媚こびる嫌な女との線引きが微妙に難しかった。

素敵な恋人が欲しいと思ってるのと同時に、実は仲の良い女友達に囲まれる女性というのも理想としている。ちゃんちゃらおかしいと笑われそうだけれど、わたしはいたって真剣だ。

「いきなりでビックリしちゃったのよ」

困ったような表情を浮かべて見せると、聖子がうんうんと頷いた。

「まあ、そうよね。今まであんまり居なかったタイプだし。でも、素敵〜」

はしゃいでいる聖子を横目にホッと息をつく。少しはフォロー出来たようだ。

それにしても、これは好みの問題なんだろうか。日比野さんの態度は聖子が言うほど素敵には見えなかった。あんな風に馴れ馴れしい男はあんまり好きじゃない。馴れ馴れしいといえば、藤崎さんの友達の高坂こうさかさんも相当馴れ馴れしいけれど、ここまで嫌な気持ちにはならない。

贅ぜいたく沢は言わないと決心したばかりだけど……

完璧な理想の男など居ないのだ。少しくらい気に入らないところがあっても、総合的に良ければそれで良いと思わなければ。

さっきの態度だって、今流行りのワイルド系ツンデレ男かもしれないじゃない。いや、本当にそれが流行りかどうかも知らないし、わたし的にはツンデレなんてムカつくだけだけど。

ああ、また否定的になってしまった。

心の中でひとつため息をついて、まだはしゃいでいる聖子と総務部に向かった。

忙しいまま、数日が過ぎた。外は余りに寒く、それに外食する時間もなかったもので、今日のお昼休みには総務部の数人で社員食堂に行った。

他愛ないおしゃべりをしながら食事をしていると、突然現れた日比野さんが、「一緒にいい？」

と言いながら、わたしが返事しないうちに目の前に座った。

その瞬間、聖子をはじめ、同僚たちが色めき立つ。

「日比野さん、お疲れ様ですっ」

「もう会社には慣れましたか？」

嬉しそうな顔をして矢継ぎ早に話しかける彼女たち。

いい大人に何聞いてんの。新人社員じゃないんだから、慣れないとかないでしょ。と、内心でまた毒を吐く。

「ありがと。忙しいけど、なんとかやってるよ」

にこりと笑い、食事を始める日比野さんの様子を聖子たちは頬を染めながら見つめていた。

そんなマジマジ見るような顔か？

確かに、悪くはないわよ。おしゃれな若手俳優って感じがしなくもない。つーかき、こんなにあからさまに見つめられているのに、よく食べられるわね。そんなに自分に自信があるのかしら。

「いつもここで食べるのか？」

日比野さんがふいに顔を上げて尋ねてきた。その視線は、なぜかわたしに向いている。

……えーっと、これはやっぱりわたしに聞いているの？

急な展開に口ごもっていると、焦れたように聖子が口を挟んだ。

「色々ですよ。コンビニで買ってきたり、外のお店に行ったり。でも面倒な時は社食が便利ですね」

「……ああ、今日は一段と寒いしな」

日比野さんがわたしに向かつてにこやかに言った。

とりあえず愛想笑いはしたけど、言葉はまだ返せない。なんでいちいちこちを見るかな。聖子たちも微妙な顔をしているじゃない。

「日比野さんっておいくつなんですか？」

「彼女はいるんですか？」

気を取り直した聖子たちが質問を続けた。

それを横目で見ながら、やっぱりバカバカしいと毒づいてしまう。でも、以前の自分もこんな感じだったのだ。そう思うと、どうしようもなくムカついてきた。

あの時のわたしのぶりっ子加減は、思い出すだけで反吐が出そうだ。まわりもきつとこんな風に冷やかな目で見ていたのかもしれない。上手くいけばそれなりに微笑ましいけど、結果として振

られたのだから、ただのお笑いぐさだったろう。

「歳は二十八。彼女は今は居ないかな」

日比野さんは機嫌良く質問に答え、そしてわたしをじっと見た。

……ここまであからさまな人も珍しい。

悪い気はしないけど、それほど嬉しいわけでもない。どうしてだろう、結構楽しみにしてたはずなのに。何が引つかかっているんだろう。こんなわかりやすいアプローチ、相手がもし藤崎さんだったら、それこそ飛び上がるくらい嬉しかったはずだ。

そんなことを思っている間に、さっさと食べ終わった日比野さんがトレーを持って席を立った。

「じゃあ、お先に」

にこやかに去っていく後ろ姿が見えなくなると、聖子たちが一斉にわたしを見た。責められるのかと一瞬身構えたけれど、その顔は一樣にニヤニヤしていた。

「残念。わかりやすい人だわ。明らかに七実狙いじゃない」

少しも残念そうに聞こえない声で、聖子が言った。

「今度こそいけるわよ、七実。頑張って!!」

励まされても困る。しかも今度こそって、思いつきり余計なお世話だわ。

「わたしたち、七実に幸せになつてほしいのよ」

あの時も、同じようなことを言われていた。今よりもう少し純粹だったわたしは、焚たきつけられるままに頑張つて、そして玉碎たまくだしたのだ。

とはいえ結果振られたことは、彼女たちとはまったく関係ない。頑張ろうが頑張るまいが、彼はわたしを選ばなかった、それだけなんだから。そうは思ってもムカつくものはムカつく。

だいたいそんな過去があれば、当然それ以後は慎重になる。もう彼女たちに踊らされるつもりはない。それに、彼女たちもそこまで本気なはずはない。

所詮、女友達なんてそんなものだ。

目の前ではしゃぐ彼女たちに曖昧に微笑みながら、ますます微妙な気持ちになった。

恋人が欲しい。それは切実な願いだ。今までみたいなの、あり得ないバカみたいな理想を掲かげる気はない。わたしの理想通りの人なんて居ないんだから。いや、居るかもしれないし、実際に居たけれど、少なくともわたしの前にはもう現れないだろう。ドラマティックな展開だって、期待してない。

それでも、日比野さんの態度にはどう反応すべきか図りかねている。あからさますぎる、というのもその理由だけ何かが引つかかっていた。それが何だかわからなくて、余計にイライラしてしまう。

そんな心の内などお構いなしにまだ盛り上がっている友人たちを、わたしは少し冷めた目で見ていた。

忙しいと言いつつも、ほぼ定時には退社した。うちの会社の入社三年目なんてこんなものだ。

白い息を吐きながら駅に向かって歩き、途中で祖母に電話をして帰宅時間を告げる。帰宅ラッシュ

の熱気のこもった電車を乗り継いで、最寄り駅で降りる頃には、空気の冷たさが心地良くなっていた。駅前の商店街を抜けると住宅街に出る。するとすぐに、大きな木の影が見えてくる。

我が家の古い銀杏の木だ。葉がすべて落ちた今は枝のシルエツトしか見えないけれど、葉が生い茂る季節はそこだけ真つ暗で、夜の闇にぼつかり開いた穴のように見える。一見恐ろしいけれど、それを目にした瞬間、ようやく我が家に帰ってきたのだと安堵する。

古い門をくぐり、母屋の玄関の鍵を開ける。

「ただいま」

奥に向かって声を掛けると、

「おかえりー」

と祖母の声が迎えてくれた。

自分の部屋に入り、部屋着代わりのジャージに着替える。それから洗面所で顔を洗い、化粧を落とした。さっぱりして台所に行くと、祖母が夕食の支度をしていた。

「お腹すいたー」

「あとちよっと待って。ああ、その胡麻^{ごま}すって」

祖母が作業台代わりのダイニングテーブルの上にあるすり鉢を指さした。中を覗くと炒^いり胡麻^{ごま}の香ばしい匂いがある。わたしは横に置いてあるすりこぎを持って、ゴリゴリと胡麻をすり始めた。

「今日は何かあった？」

祖母にそう聞かれるのは毎日のことだ。小さな子どもの頃から繰り返されてきた会話の始まり。

基本的に祖母には隠し事はしない。藤崎さんのことだって話してきた。失恋した時、最初になくさめてくれたのも祖母だ。

「んー。情報管理部に新しく来た人とご飯食べた。男の人」

「へえー。二人で？」

「まさか、社員食堂でみんなだよ。……何かねえ、わたしに興味があるみたい」

ああそうか、興味だ。日比野さんに感じた違和感。

好意とは明らかに違う、あれはきつと興味だ。何だか珍しいものでも見ているような、そんな感覚。だから戸惑う。でもまあ、興味を持たれるのは悪いことではないだろう。

「ふーん、興味ねえ」

祖母がなんだか面白くなさそうにつぶやいた。

胡麻がすっかりすりつぶされた時、

「あ、そうだ」

と祖母が何かを思い出したように居間に入って行った。それから、胸に抱えるほどの大きさの包みを持って戻ってくる。

「七ちゃん、これ高木くんに届けに行つて来て」

受け取った荷物は結構重い。

「何これ？」

「宅配便。昼間、預かってて忘れてた。ついでにご飯まだなら誘つてきて」

昼間ねえ。また朝帰りして寝てたのか、はたまた出かけていたのか。面倒だなと思いつつも、荷物を抱え直して玄関に向かった。

食事なしの下宿とはいえ、祖母は下宿人をよく食事に誘う。今の住人は主に社会人で、夜遅く帰ってくる人も多いので、必然的に夕食の時間が合うのは高木さんくらいになるけど。

母屋から続く石畳を歩き、下宿屋の玄関を開けた。靴を脱いでギシギシ鳴る廊下を気にせず歩く。高木さんの部屋の前まで来て、ふと、この前取り換えた電灯を見上げた。よし、ちゃんと明るいぞ。荷物を持ち直し、扉を下ドンと叩いて声を掛ける。

「高木さーん、宅配便」

一拍置いて部屋の中からガタガタと音が出た。少し待っていると、バツと扉が開いて、いつもの半纏姿にもつきり頭の高木さんが顔を出した。

はい、とわたしが荷物を差し出すと、慌てたように受け取る。

「あ、ありがとう。七実ちゃん」

「どういたしまして。お祖母ちゃんが、夜ご飯まだなら一緒にどう？ って」

「えっ、うん。ありがとう、助かります……」

口の中でもごもごつぶやく高木さんを見上げると、まだ眠たそうな顔をしているのに気づいた。

「寝てたの？」

「え？ あ、いや、……ごめん」

だからなんですぐ謝るの？

「じゃあ顔を洗ってから来なね」

「うん。ありがとう」

ヘラツと嬉しそうに笑う高木さんはなんだか子どもみたいで、呆れる以前に笑ってしまう。共同洗面所に向かう高木さんを見送ってから、先に母屋に戻った。

台所に入るとすでにご飯の用意は終わっていた。わたしがすった胡麻ごまは、ほうれん草ほうれん草の胡麻和えごまあえに使われていた。

「高木くん、来るって？」

「うん」

祖母と自分と高木さんの分のお茶碗を出してご飯をよそう。肉じゃが、鱈たらの照り焼き、ポテトサラダに胡麻和え、お漬物とお味噌汁。居間のコタツの上に並べ終えたところで、玄関の戸が開く音がした。

「こんばんはー」

「どうぞ、入って！」

居間から声を張り上げると、しばらくしてから高木さんが顔を出した。

「お、お邪魔します」

「高木くん、そこに座って」

高木さんを座らせ、彼を挟むようにしてその左右の一辺に祖母とわたしが座る。祖母がコタツに最後に置いたのは、もちろんほぼ沸騰直後のお茶だ。

「はい、いただきます」

「いただきます」

高木さんがいくら大人しいとはいえ、三人いれば二人で食事をするよりも賑やかなる。まあ一番喋っているのは祖母だけだ。

「高木くん、おかわりはいっぱいあるからね」

言いながら、祖母は高木さんの小皿におかずをどんどん載せていく。

「ありがとうございます」

恐縮しながらも高木さんは嬉しそうだ。

「そういえば七ちゃん、さっき言ってた人ってカッコイイの？」

ずっと高木さんに話し掛けていた祖母が、急にわたしに尋ねた。

「さっきって？」

「ほら、七ちゃんに興味があるとか」

あーあ、曰比野さんのことか。

「んー。そうねえ、イケメンだよ」

顔だけはね。性格はちよつと、まだ掴めないけれど。

「ま、わたしにもとうとう春が来るかもねー」

冗談交じりにそう言った瞬間、

「あだっつ！ ……い、いや、ごめん」

突然、高木さんが奇声を発した。

何？ まったくもう、変な人なんだから。じろりと睨むと、高木さんは焦ったように目を逸らした。

「そんなに急がなくてもいいじゃない。七ちゃんはまだ若いんだから。ほら高木くん、これも食べて」
なぜかちよつと機嫌の悪くなった祖母が高木さんにおかずを勧めた。

まだ若い……そうかもしれないけど。

また高木さんの世話を焼き出した祖母を改めて見る。

祖母は歳を取った。それは当たり前のことだ。わたしだってもう子どもじゃない。でも、もし今この人が居なくなってしまうたら……考えるだけで恐怖が心を掠める。

どれだけ祖母に依存しているのか、自覚はしている。だから、やつぱり早く恋人が欲しいと思つてしまう。ずっとそばに居てくれる誰かが欲しい。家族が欲しい。

こんな依存した考え方だから、恋人が出来ないんだろうか。そうは思っても、この孤独感を埋められるのは、まだ見ぬ誰かしかないと思つていた。

わたしは若い。でもきつと、残された時間はそんなに多くない。

その現実がくせえんに愕然がくせえんとしながら、祖母たちに気づかれないうようにそつとため息をつき、まだ熱いお茶を一口飲んだ。

クリスマスがまた少し近づく。街の景色はどこもかしこもクリスマスカラーで溢れ、いやでも気持ち持ちは盛り上がる。

我が家も例年通りに小さなツリーを飾った。下宿屋の玄関ホールにも同じものを置いてある。祖母はイベント好きだ。

祖母に渡すプレゼントはもう用意してある。もちろん下宿に住む人たちにも。これも毎年恒例だ。こういったことがあるから、本当に一人ぼっちという意味での寂しいクリスマスを過ごしたことはない。

それでも、恋人同士で過ごすクリスマスというものを一度くらいは体験したいと思う。とはいえ、いまだにそれらしい気配はない。日比野さんにはちよくちよく話し掛けられるけれど、それ以上の何かがあるわけでもない。

当然のことながら社内は現在、年末進行の真つ最中で誰も彼もが忙しく、恋愛に現を抜かしている場合ではなかった。

その日は少し残業してから会社を出た。歩道に出た瞬間、冷たい北風が強く吹いてくる。思わず身を縮こませて歩き出した時、誰かが肩を叩いた。

振り返るとそこに日比野さんが立っていた。そして少し驚いたわたしの顔を見てニヤツと笑う。

「よお。駅まで一緒に行こうぜ」

そう言うなり、日比野さんはわたしの返事を待たずに歩き出した。

……まだいいとも悪いとも言っていないんですけど？

この強引さはどうにも好きになれない。並んで歩くけれど、誘っておきながら日比野さんは無言だった。こういうのってなんだか余計に気を遣う。

「お仕事は忙しいですか？」

「まあな」

こんな当たり前のことを聞いてどうする？ そうは思っても、大した話題は出てこない。

だいたい、彼とはまだ、べらべら世間話ができるほど接触していないのだ。どうやらわたしに興味があるらしいけど、それすら定かではない。

これが過去のわたしで、相手が藤崎さんだったら、チャンスとばかりに自分をアピールするところだけれど、とてもそんな気になれない。

でも、チャンスは自分から掴みに行かないと、幸せにはなれない。それが当たりかはずれかは、掴んでみなければわからない。

「夜はやっぱり寒いですね」

「冬だからな」

わたしのベタな切り出しに、日比野さんはまたそっけなく答えた。

「……もうすぐクリスマスですね」

めげずに街を彩るイルミネーションを見ながらつぶやくと、今度は返事すらなかった。なんだよ、コイツ。やつぱりムカツク。

結局、駅に着くまで意味のない言葉のやり取りを繰り返しただけで終わった。「じゃ」と言つて別の改札にさっさと入つていった日比野さんの後ろ姿を見送りながら、慥然と立ち尽くす。

あの人、絶対わたしのこと好きじゃないと思う。

だって多少なりとも好意があれば、自分から話くらいするでしょ？ わたしばかり一生懸命喋つて、なんかもう精神的に疲れたわよ。いつも笑顔で可愛い有田さんにも限界というものがあるのだ。こんなチャンスならいらなかつつーのっ！ はずれだ、はずれつ。

わたしは貼り付けていた笑みを消して歩き出す。祖母に電話をしてから改札を抜け、いつもの満員電車に乗り込んだ。

毎日のことだけれど、自宅の最寄り駅に着くとホツとする。わたしが一番自由でいられる場所がすぐそこにあるから。ウソくさい笑顔も、媚びる仕草もここでは不要だ。

改札を抜けて、大して広くもない駅前のロータリーに出ると、正面のガードレールに凭れるように座っている、もつさりした男が目に入った。高木さんだ。

高木さんはぼんやりと行き交う人を眺めていた。擦り切れたジーンズとジャンパーという格好はこの季節にはあまりにも薄着だ。さすがに半纏は着てないんだと思いつつ、まだこちらに気づかない彼に近づくと、

「何してるの？」

「う、うわっ」

声を掛けると、小さくビクついた高木さんは、バランスを崩してガードレールから落ちそうになった。相変わらず漫画みたいなリアクションだ。

「な、七実ちゃん、おかえりっ」

「はい、ただいま。で、何してるの？」

もう一度重ねて聞くと、高木さんは照れくさそうに頭をかいた。

「いやあ、ちよつと人間観察を」

「……にんげんかんさつうー？ こんな時間に、そんな格好で？」

胡散臭げに見ると、彼は慌てて立ち上がって姿勢を正す。

「い、一緒に帰ろうー！」

そう言つて取り繕うようにヘラツと笑う。相変わらず笑顔が可愛い男だ。

「……まあいいけど」

ロータリーから商店街に入り、アーケードを並んで歩く。時々吹き抜ける冷たい風に身をすくませる。ふと見れば高木さんもとても寒そうで、両腕で自分を抱えるようにして歩いていた。

「今日は一段と冷えるね」

ブルツとからだを震わせて高木さんが言った。

「そうね」

そりゃそんな格好してりゃ、余計に寒かろうよ。もつと暖かい服を着れば良いのに。

そう思いながら、先日彼のために用意したマフラーを思い浮かべた。今年のクリスマスプレゼント選びはバッチリだわ。

「し、仕事は忙しい？」

「別に、普通」

「そ、そっか……」

ちらりと横目で見上げると、高木さんが困った顔をしている。ちよつと意地悪過ぎたかしら？

なんだか高木さんが、日比野さん相手に一生懸命話し掛けていたさっきの自分と重なる。傍から見たらわたしもこんな風に滑稽こっけいだったのかと思うと、妙に笑えてきた。やつぱり有田七実は愚かなピエロだ。

「どうしたの？」

自嘲気味な考えに思わず小さく嘖き出すと、高木さんが心配そうに覗き込んできた。黒ふち眼鏡の奥のキレイな目が、アーケードの明かりを受けてキラキラと輝いている。もうちよつとまともな格好をすれば、もつと素敵に見えるのに。

「別に」

ニッコリ笑って答えると、高木さんが驚いたように目を見開いた。

高木さんといると緊張感がなくなつてラクチンだわ。表の顔を保つのはとても疲れる。つまらない会話を続けるのも、無理やり笑顔を作るのも。

商店街を抜けて住宅街に入るとすぐ、暗く大きな木の影が見えてくる。

ああ、今日も帰つて来た。素すの自分で居られる場所。どんな自分でも受け入れてくれる場所だ。

「高木さん、晩ご飯食べた？」

「え、いや、まだだけど」

「じゃあ一緒に食べよ」

「……うん、ありがとう」

家族の食卓に集まる人数は、多い方が良い。わたしも祖母も本当は寂しがり屋だ。

亡くなった祖父は寂しがり屋の祖母のため、彼女の名をつけた『さつき荘』を残し、わたしの母は、凶らずも祖母のもとにわたしを残した。どうしようもない親だけれど、それだけは最良の選択だった。

まもなく見えてきた家の明かりを指して歩く。高木さんもわたしも、もう無言だ。でも、焦りや気まずさはない。

ここではもう、何も取り繕つくろう必要はないのだから。

「今夜、付き合えよ」

週の半ば、お昼前に会社中の倉庫や保管庫を回って備品のチェックを終え、総務部へ戻ろうと同

僚数人と廊下を歩いていたわたしは、前から来た日比野さんに突然そう声を掛けられた。

「えっ？」

「終わったらロビーで」

日比野さんは、またわたしの返事を聞かずにさっさと行ってしまった。あまりのことにしばらくの間、その場に呆然と佇たすんでしまう。

何あれ？ だから返事を聞けつーの。付き合うなんて一言も言っていないから。こっちの都合とか考えないわけ？ それに誘うとしたら普通週末でしょ？ 今日、何曜日だと思ってるの？ 本気で断りたいんだけど……ここで引くのもなんだか負けのような気がする。何に？ と言われると困るけれど。

「きゃーっ、すごいじゃん、有田さんっ。デートだデート」

「日比野さんが七実狙いって本当だったんだっ。羨うらやまましーっ」

わたしの内心も知らずに同僚たちははしゃいだ声を上げる。

うるさいなあ。それは本当に本心から言ってるの!?

まわりの過度な期待が、嫌でもわたしに過去の失敗を思い出させる。下手に動いてあの時のような惨みじめな自分になりたくないという気持ちと、これ以上孤独に耐えられそうもないという気持ちとが交錯する。

日比野さんが今までのわたしの理想とかけ離れていることは、わかり切っている。けれど、いつまでも現実的ではない理想を追っているわけにはいかない。

もしかしたら、日比野さんにもわたしのまだ知らない良い所があるかもしれないじゃない。もしかしたらだけど。

「楽しみだねーっ、七実」

「……うん、そうね」

わたしは無理やり生み出した淡い期待を込めて頷くのだった。

定時を少し過ぎ、今日は日比野さんに会うので遅くなると祖母に電話を掛けてから、玄関ロビーに向かう。すると、すでに日比野さんはつまらなそうな顔をして待っていた。

「すみません、お待たせしました」

言いながら駆け寄ると、彼は待ったとも待っていないとも言わずただ曖昧に頷く。

周囲の好奇心な視線をなるべく意識しないようにしながら、二人で外に出た。

「俺、この辺の店知らないから、お前が適当に決めて」

駅の方へ歩き出した途端、日比野さんが言う。そこで彼へのなけなしの期待は砕けた。

はあ？ この人何言っちゃってるの？ アンタ何様？ 王様か!? 自分から誘っという、その態度はどうなの？

ありえない、ありえない、と心の中でつぶやきながら、とりあえず歩いて、以前同僚と行ったことのある居酒屋へと案内した。

「ここで良いですか？」

一応店の前で尋ねてみる。まあ嫌がってもここに入るけどな！ 心の中でそう毒つきながら日比野さんを見ると、彼はいいんじゃないやね、とつぶやいた。

ふんっ、どこまでも上から目線なわけね。

店の中に入ると、平日だからか空いていた。案内されたテーブルに向かい合わせに座ろうとした時、すぐ近くでどこかで聞いたような声があった。

「な、七実ちゃんっ？」

その声に振り向く。通路を挟んで反対側の座敷から、ちよつと見目の良い男が驚いた顔でわたしを見ていた。

誰？

マジマジと見つめると、その男の目が見慣れたキレイなものであることに気づく。

「……高木さん？」

思わずつぶやいた声に、その人が頷いた。

あらまあ、びっくりだ。

いつものもっさりした前髪は後ろに梳かされ、形のいい額が露わになっていた。黒ぶち眼鏡のない顔はすつきりとしていて、切れ長の目はやっぱりキレイだった。いつものだらしない格好と違って、タートルネックのセーターに、ジャケットとストラップス。その姿はクールなイケメンと言っている。へえ、高木さんって普通の格好すればこんなに格好良いんだ。

わたしは驚きを隠せず、ぼかんとしてしまう。

「誰？」

先に座っていた日比野さんが興味深そうに聞いてきた。

「えっと……」

なんと説明しようかと考えていると、

「あー、きみが高木先生の七実ちゃんかあ」

と能天気な声が割って入ってきた。その声があった方に顔を向けると、高木さんの前に座っていたスーツ姿の男が楽しげな表情でわたしたちを見ていた。

は？ 高木さんの、って何よ？ つか、先生って何？

「き、木嶋っ」

急にオロオロし出した高木さんに構わず、その人はニコニコしながら近寄ってきた。

「やあやあ、初めまして」

その男はそう挨拶すると、スーツのポケットから名刺入れを取り出し、名刺をわたしと日比野さんに渡した。

「星伝舎の木嶋勇です」

名刺に書かれた社名は、大手の出版社のものだ。

「先生って……高木さん、もしかして小説家とかなの？」

思いがけない事実に驚く。

「い、いや、そんなたいしたもんじゃないんだ。細々とやっているだけで……」

今の格好良い外見とは裏腹に、高木さんはいつものようにおどおどしながら答えた。その様子に
なぜだかホツとする。

「良かったら一緒にどうです？ ご馳走しますよ」

木嶋さんが愛想良くそう言うと、わたしが答える前に日比野さんがすくつと立ち上がる。

「奢ちかってもらえるなんて、ラッキーじゃん」

そしてさつさと座敷を移動して、木嶋さんの隣に座ってしまった。

……おいおいおい。ちよつと待てよ。この人、一体なんなの？ 何か話があつてわたしを誘つた
んじゃないの？

わたしはもやもやした気持ちをとんとか抑え、心配そうな顔でわたしの方を見ている高木さんの
隣に座った。

目の前では、いつの間にか店員を呼んだ日比野さんが次々と注文をしている。しかもわたしには
何も聞かない。

おいこら、無視かよ。心の中がどんどんどす黒くなりそうだ。

「な、七実ちゃんは何が良い？」

隣から掛けられた声に振り向くと、高木さんがメニューを開いて見せてくれた。わたしがジュー
スみたいな酎ちゅうハイを指さすと、それを店員に頼んでくれる。ついでにわたしの好きそうな料理も一
緒に。

さすが高木さん、長年一緒にご飯を食べているだけあつて、わたしの好みを熟知している。それ

より日比野よ、高木さんの方が気を遣ってくれるってどういうこと!? 誘つたのはお前だろつ。

苛立いらだたしさを込めて見ると、当の日比野さんはすでに来ていたビールを飲みながら木嶋さんと楽
しげに話している。

……なんだこれ？ こんな展開ってありなの？

遅れて運ばれてきた甘い酎ハイをちびちびと飲みながら、心の中でさらに毒づいた。

「ご、ごめんね。邪魔しちゃったみたいで」

隣で小さな声があった。高木さんが困った顔でわたしを見ている。邪魔をしたのはこっちの方かも
しれないのに。

「別にいいけど。高木さんこそ良かったの？」

「うん、ただ食事してただけだから」

彼は穏やかに微笑むと、飲みかけのビールに手を伸ばした。

わたしはグラスを傾ける高木さんの横顔をちらりと見る。

普通の格好をしている高木さんは普通に格好良い。でも、いつものだらしな性格好も決して嫌い
ではなかったことに今更気がついた。逆に今の高木さんはいつもの高木さんじゃない気がして、さつ
きはなんだか落ち着かなかつた。でも、口を開けばわたしがよく知っている彼だったので、とても
安心する。

結局、最後まで日比野さんは木嶋さんと盛り上がっていて、わたしとはほとんど口をきかなかつた。

わかったのは木嶋さんが高木さんの担当だということ、二人は打ち合わせの帰りにここに食事に来たということだけだった。

散々飲み食いして、ちゃっかり木嶋さんにご馳走になって、さらには木嶋さんと同じ方面へ帰っていく日比野さんを、駅で高木さんと見送ったところで、ようやく一息つけた。

「なんだかなー……言葉もないってこういうことを言うのかしら。」

祖母にこれから帰ると連絡を入れてから、初めて高木さんと二人で電車に乗った。いつもより遅いとはいえ電車はやはり混んでいて、わたしたちはつり革に掴まってぼんやりと立つ。

「……ごめんね、すっかり邪魔しちゃって」

ボソッとまた謝ってきた高木さんを見上げる。そこにはやつぱり困ったような顔があった。

「いや別に……」

結局、わたしも日比野さんが何をしたかったのかよくわかんないし。ここまで訳がわからない男も珍しいよ、本当に。

「つ、付き合ってるの？ 彼と」

「……はあ？」

どこをどうしたらそう見えるのか。睨むように見上げると、途端に高木さんはおどおどし出す。

「付き合ってるわけじゃないじゃん」

わたしがそう言うと、彼はちよつとだけヘラツと笑った。

そこで笑うか？ 内心ちよつとムカついて、それ以上何も言わずにまた前を向いた。

電車の揺れに従って自分のからだも揺れる。大して飲んでいないけれど、ほんのりとアルコールが回っているようだ。

次により換える電車は、これから乗車する駅が発発になる各駅停車で、運良く並んで座ることが出来た。

ホツとしながら座席の下で疲れた脚をぶらつかせる。血の流れが良くなったのか、脚が軽くなったような気がした。

「大丈夫？」

隣に座っている高木さんが心配そうな声で言った。

「うん。まあ慣れてるから」

パンプスを一日中履いているのは辛い。特に電車の中では立ちっぱなしだし。今日みたいに帰りの電車で座れるなんて奇跡に近い。

そう言えば、高木さんが出かけているのを実際に見たのは初めてだ。そっか、小説家だから、毎日出かける必要はないんだ。

「高木さんって、いつから小説を書いているの？」

「えっ。か、書き始めたのは子どもの頃からで、本格的に小説家を目指したのは大学を卒業してからなんだ」

ふーん。ということは、うちの下宿に住み出した頃からだ。

「どんな話なの？ 本屋さんに売ってる？」